資　料

保育者養成における「器楽」科目の開講手法に関する一考察
―本学における開講時期改定の試みをとおして―

仲　嶺　まり子

Discussion about the Method to Give Musical Instrument Lessons in Training for Child-Care Workers: From Our Experience of Changing the Timing of Course Commencement

Mariko NAKAMINE

【要　　旨】

本研究は、ピアノ未経験者による弾き歌い演奏技術向上を目的に実施された「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」の開講時期改定の効果について検証するものである。「器楽Ⅰ」は、器楽曲によるピアノ奏法、「器楽Ⅱ」は、こどものうたの弾き歌い奏法である。平成20年度までは「器楽Ⅰ」は基礎的技能修得を重視した形態であったが、平成21年度からは「器楽Ⅱ」の時間数増加を図ることで、本文中の「開講時期の改定およびレッスン形態」で示したように「器楽Ⅰ」の時間数が減少したため、それに伴う基礎的技能修得の低下とそれらが弾き歌い演奏へ及ぼす影響が危惧された。

そのため、「器楽Ⅰ」の開講時間減少の影響の検証を目的に、改定前と改定後の各２年間の「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」の評価および単位取得率の調査を実施した。その結果、改定後に「器楽Ⅰ」の評価および単位取得率が低下したにもかかわらず、「器楽Ⅱ」の評価および単位取得率の上昇が認められ、開講時期改定の一定の効果が検証された。

本稿は、これらの効果の諸要因についての分析をふまえた一考察である。

【キーワード】

ピアノ　　初心者　　バイエル　　弾き歌い　　課題終了率

１．はじめに

本学初等教育科では、保育者養成におけるピアノ演奏技術修得のための科目として「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」を開講している。特に、入学試験にピアノ実技試験を課していないこともあり、入学前のピアノ経験の未熟な学生が多く、１年前期にはそれらの学生を対象に器楽曲の週２回レッスンを実施するなど、短期間での基礎的な演奏技術向上に力を入れ一定の成果を上げていた。一方では、保育現場で必要とされる弾き歌い演奏技術の修得については顕著な成果を出すには至っていなかった。

しかし、保育現場に就職する学生にとって弾き歌い演奏技術の修得は必要不可欠であり、その技術は、様々な音楽表現活動を可能にし、保育者にとっても子どもにとっても多くの喜びをもたらすものである。そのような弾き歌い演奏技術の向上を目指し、平成21年度に「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」の開講時期改定に取り組んだ。

そこで、これらの改定の有効性を検証するため、平成19、20年度（改定前）と平成21、22年度（改定後）の「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」における学生の評価と単位取得状況について調査を実施した。

２．開講時期の改定およびレッスン形態

平成20年度までは、「器楽Ⅰ」は１年次前期（演習１単位)、「器楽Ⅱ」は１年次後期（演習１単位）に開講し、１年次に集中的にピアノに取り組むようにしていた。「器楽Ⅰ」では器楽曲（バイエル、ソナチネ等)、「器楽Ⅱ」ではこどものうたの弾き歌いを課題にしていた。なかでも「器楽Ⅰ」では、本学のバイエル課題曲の前期終了を目指し、演習１単位にもかかわらず週２回の個人レッスンを実施するなど独自性を出していた。１年次後期「器楽Ⅱ」は、週１回の個人レッスンの実施であった。

しかし、２年次では「器楽」科目が開講されていなかったため、ピアノ演奏の機会が少なく、１年次で修得したピアノ演奏技術を卒業時まで保持することが困難な状況であった。

そこで、平成21年度より「器楽Ⅰ」は１年次通年開講、「器楽Ⅱ」は２年次前期開講に改定し開講時期の延長を図った。この改定により２年次にピアノ学習が続けられるようになり、演奏技術保持と向上が期待された。

一方、この「器楽Ⅰ」の通年開講に伴い、これまでの特徴であった初心者に対する週２回レッスンを週１回レッスンに変更し、開講コマ数を調整した。この時に最も危惧されたことは、週１回レッスンでは器楽曲（バイエル）の合格曲数が減少することが予想され、「弾き歌い」に必要なピアノ演奏の基礎的技能が修得できないのではないだろうかということであった。

「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」は、改定前も改定後も選択必修科目で開講されているが、いずれもほぼ全員が受講している。

３．教材および評価方法

「器楽Ⅰ」では、学生への課題提示および非常勤講師を含めた複数担当教員の共通指標として「ピアノ課題表」（図１）を使用している。

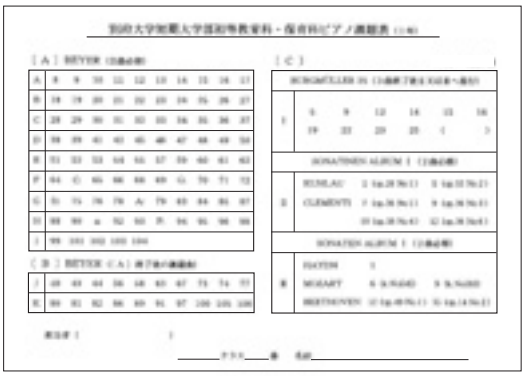


図１　「器楽Ⅰ」ピアノ課題表

初心者は［Ａ］の課題から開始する。教材は『バイエル教則本』を使用し、課題曲については、これまでのレッスンにおいて合格率の低い曲を後半［Ｂ］に分けるなどし、本学独自の課題曲順になっている。評価基準は、［Ａ］部分85曲終了でＣ評価、［Ｂ］部分20曲終了でＢ評価、ブルグミュラ-5～７曲以上終了でＡ評価が可能という４段階評価で、ブルグミュラ-の終了曲数は各年度の平均値により決定している。

経験者は［Ｃ］の課題から開始する。教材は『ソナチネ教則本』・『ソナタ教則本』を使用し、指定の課題曲終了により担当者が５段階評価している。

「器楽Ⅱ」の弾き歌いでは、チャイルド社の『こどものうた200』『続こどものうた200』を教材として使用し、掲載曲による「こどものうた進度表 no. 1～３」を共通指標として作成している。「こどものうた進度表 no. 1」（図２）

には、難易度と保育現場での使用頻度等を考慮した上で50曲を選曲掲載し、それ以外の100曲を「こどものうた進度表 no. 2, no. 3」に掲載している。評価基準は、進度表の35曲終了でＣ評価、45曲終了でＢ評価、50曲終了でＡ評価、50曲以上終了でAA評価が可能な５段階評価となっている。

こどものうた進度表　No.1

図２　こどものうた進度表

また、開講時期の改定による教材の変更は行わなかったが、それらの取り扱い時期についての再検討の結果、１年次後期（２月中旬）の「保育実習Ⅰ」をふまえての弾き歌い経験の必要性を考慮し、「器楽Ⅰ」では、１年前期＋１年後期前半を器楽曲、１年後期後半をこどものうたの弾き歌いに配分した。そのため、学期途中での教材変更の混乱を防ぐため、弾き歌い移行時にはレッスングループ毎に練習方法等についてのオリエンテーションを実施し、移行がスムースに行えるようにした。

２年前期の「器楽Ⅱ」では、１年次後期後半の弾き歌い課題曲を引き続き行うこととした。「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」ともに、評価基準は改定前と同様とした。

４．初心者および経験者の定義

前述のような教材および課題をふまえ、本学における「ピアノ初心者と経験者の定義付け」を行っている。まず４月の開講前に「音楽オリエンテーション」を開催し、入学までに何らかのピアノ演奏の経験がある学生には実際に任意の曲を演奏してもらい、その結果、「ピアノ課題表」（図１）における課題［C］の楽曲演奏の可能な学生を「経験者」と位置づけ、その他の学生は「初心者」にグループ分けしている。

５．調査の目的と方法

⑴　調査目的

「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」の開講時期改定に伴う課題曲終了率を調査比較し、開講時期の改定が初心者の「こどものうたの弾き歌い」演奏技術向上にもたらした効果について検証することが目的である。

⑵　調査対象

平成19年度～平成22年度入学の初等教育科保育・幼稚園コースの学生の「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」の評価

⑶　調査方法

平成19年度～平成22年度入学者の「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」の評価をもとに、各年度の単位取得率を算出し、課題曲終了状況を調査。

調査資料として「音楽記録表」（図３）を参照する。「音楽記録表」は「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」の個人記録簿で、ピアノ担当教員によって学期毎の評価と所見が記載されている。

⑷　調査項目

１）ピアノ初心者と経験者数

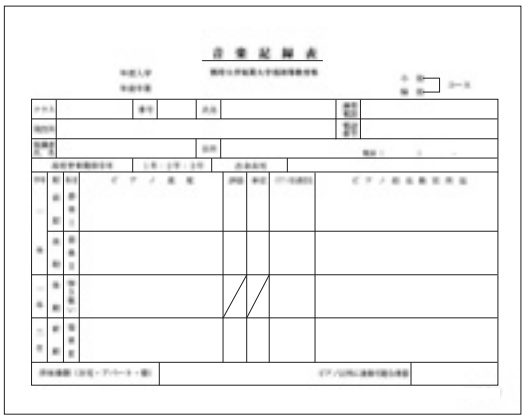

音楽記録表

図３　音楽記録表

2)「器楽Ⅰ・Ⅱ」の全体評価
3)「器楽Ⅰ・Ⅱ」での初心者の評価内訳
4)「器楽Ⅰ・Ⅱ」の単位取得状況
5) 高校での「音楽」履修状況
6) ピアノ・電子ピアノの所有率
7) バイエル課題終了者所見に見られる受講態度の特徴

6. 集計結果

表1) ピアノ初心者と経験者数
表2)「器楽Ⅰ」初心者の手法別評価一覧
表3)「器楽Ⅱ」初心者の手法別評価一覧
表4)「器楽Ⅰ」初心者の手法別評価分布
表5)「器楽Ⅱ」初心者の手法別評価分布
表6)「器楽Ⅰ」経験別単位取得一覧
表7)「器楽Ⅱ」経験別単位取得一覧
表8)「器楽Ⅰ」手法別単位取得状況
表9)「器楽Ⅱ」手法別単位取得状況
表10) 初心者の「器楽Ⅰ」評価別「器楽Ⅱ」単位取得状況（手法別）
表11) 経験別高校音楽履修状況
表12) 経験別高校音楽履修状況の推移
表13) 経験別ピアノ・電子ピアノ所有状況
表14) 経験別ピアノ・電子ピアノ所有状況の推移
表15) 初心者のバイエル課題終了者所見に見られる受講態度の特徴

7. 結果および考察

入学時のグループ分けでの「ピアノ初心者と経験者数」(表1) は、初心者が平成19年度では85%・平成20年度～22年度では90%以上と圧倒的に多い。ちなみに平成22年度入学者対象アンケートによると、初心者の入学前のピアノ経験の内訳は、全く経験がない者45%、幼稚園・小学校・中学校・高校のいずれかで経験がある者が50%であった。

表2. 「器楽Ⅰ」初心者の手法別評価一覧

器楽Ⅰ	年次		H19+H20	H21+H22
評価	A	人	58	22
		%	26.2%	10.8%
	B	人	48	35
		%	21.7%	17.2%
	C	人	64	63
		%	29.0%	31.0%
	D	人	51	83
		%	23.1%	40.9%
	合計		221	203

まず、初心者の「器楽Ⅰ」の課題終了率について見てみると、表2.「器楽Ⅰ手法別評価一覧」では、改定前はA(26.2%)、B(21.7%)、改定後はA(10.8%)、B(17.2%) に減少しているが、改定前のC(29.0%)、D(23.1%) から、改定後はC(31.0%)、D(40.9%) に増加している。また、表3.「器楽Ⅱ手法別評価一覧」では、改定前はAA(7.2%)、A(6.8%)、B(10.4%)、改定後はAA(11.3%)、A(6.9%)、B(18.2%) に増加しているが、改定前のC(40.3%)、D(35.3%) が改定後はC(36.9%)、D(26.6%) に減少している。これらを表4と表5の分布グラフで確認すると、「器楽Ⅰ」では改定前と比較して改定後のD評価が多いにもかかわらず、「器楽Ⅱ」では改定後にD評価が減少していること

表1. ピアノ初心者と経験者数

保幼コース	年度		H19		H20		H21		H22	
	受講者数(人)		127		123		109		112	
	項目		人	%	人	%	人	%	人	%
	経験者	全体	19	15%	10	8%	8	7%	10	9%
		(男)	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
	初心者	全体	108	85%	113	92%	101	93%	102	91%
		(男)	(14)	(11%)	(13)	(11%)	(9)	(8%)	(14)	(13%)

がわかる。

また、表６と表７の単位取得一覧から見てみると、改定前は初心者の76.9%が「器楽Ⅰ」の単位を取得しているが、改定後は59.1%に減少、「器楽Ⅱ」の改定前単位取得者は64.7%だが、改定後は73.4%と増加している。さらに、改定後における初心者の「器楽Ⅰ」と「器楽Ⅱ」の単位取得率を比較してみると、「器楽Ⅰ」では59.1%にもかかわらず「器楽Ⅱ」では73.4%と14.3%取得率がアップしている。

「器楽Ⅰ」では、週２回から週１回レッスンへの変更によりレッスン間隔が開いたことと、レッスン総数が30回から23回に減少したことで課題終了率が低下したと考えられる。しかし「器楽Ⅱ」では、レッスン総数が15回から22回に増えたことに加え、２年生前期は実習や就職

表３.「器楽Ⅱ」初心者の手法別評価一覧

器楽Ⅱ	年次		H19＋H20	H21＋H22
評価	AA	人	16	23
		%	7.20%	11.30%
	A	人	15	14
		%	6.8%	6.9%
	B	人	23	37
		%	10.4%	18.2%
	C	人	89	75
		%	40.3%	36.9%
	D	人	78	54
		%	35.3%	26.6%
	合計		221	203

表４.「器楽Ⅰ」初心者の手法別評価分布

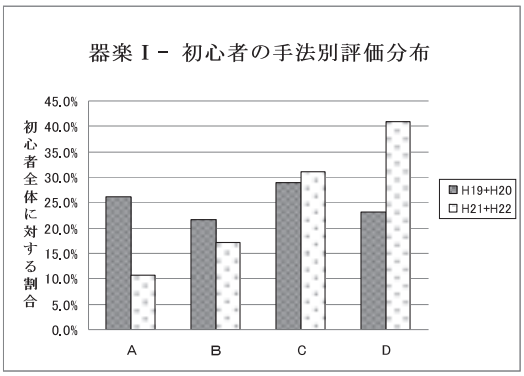


表５.「器楽Ⅱ」初心者の手法別評価分布

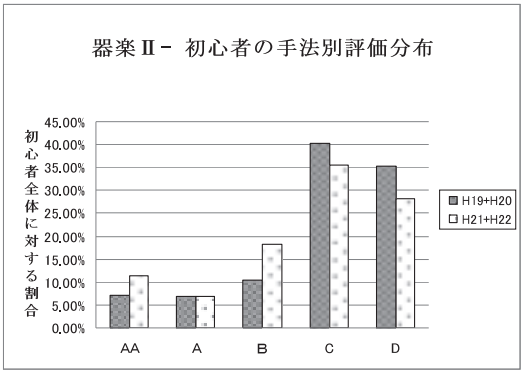


表６.「器楽Ⅰ」経験別単位取得一覧

年度		19＋20	21＋22
経験者	（人）	29	18
	%	100.0%	100.0%
初心者	（人）	170	120
	%	76.9%	59.1%
全体	（人）	199	138
	%	79.6%	62.4%

表７.「器楽Ⅱ」経験別単位取得一覧

年度		19＋20	21＋22
経験者	（人）	29	18
	%	100.0%	100.0%
初心者	（人）	143	149
	%	64.7%	73.4%
全体	（人）	172	167
	%	68.8%	75.6%

表８.「器楽Ⅰ」手法別単位取得状況

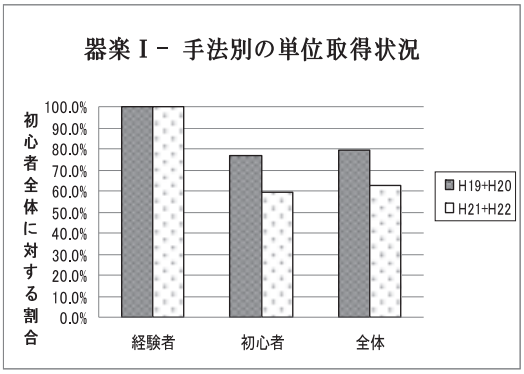
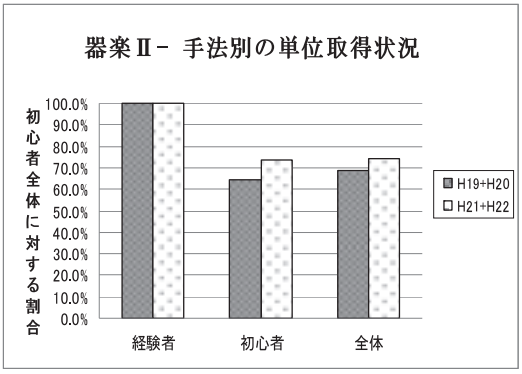


表９．「器楽Ⅱ」手法別単位取得状況



へ向けて職業意識が高まる時期でもあり、自律的、意欲的に練習に取り組むことで終了率がアップしたと考えられる。初心者の音楽記録表所見に、「よく練習する」という記述が多く見られることからも、練習に対する意識の高さを窺い知ることができる。

また、表２・表３における「器楽Ⅰ」から「器楽Ⅱ」の評価の推移を見てみると、改定前の「器楽Ⅰ」のA+B評価は47.9%と高いが、「器楽Ⅱ」になると、24.4%（AA+A+B評価）に減少している。一方、C+D評価においては、「器楽Ⅰ」の52.1%が、「器楽Ⅱ」では75.6%に増加していることから、B評価（バイエル全曲終了）の学生の中に「器楽Ⅱ」がCあるいはD評価になった学生のいることが推察できる。

ところが、改定後では「器楽Ⅰ」のA+B評価は28.0%と低いが、「器楽Ⅱ」では36.4%（AA+A+B評価）と増加し、C+D評価においては「器楽Ⅰ」の71.9%が、「器楽Ⅱ」では63.5%に減少していることから、C+D評価の学生の中にB評価以上となった学生のいることが推察できるのである。

これらは、表10.「「器楽Ⅰ」評価別「器楽Ⅱ」単位取得状況」で確認することができる。改定前の「器楽Ⅰ」のA・B評価は106人中99名が「器楽Ⅱ」の単位を取得し、７名が未取得である。改定後の「器楽Ⅱ」のC評価は75名であるが、「器楽Ⅰ」のD評価83名中33名とC評価63名中60名の93名が「器楽Ⅱ」の単位を取得していることから、18名の学生がB以上の評価を得ていることとなる。

表10. 初心者の「器楽Ⅰ」評価別「器楽Ⅱ」単位取得状況（手法別）

	器楽Ⅰ評価	年次	H19＋H20	H21＋H22
器楽Ⅱ終了状況	A－B	人	99/106	56/57
		%	93.4%	98.2%
	C	人	36/64	60/63
		%	56.3%	95.2%
	D	人	8/51	33/83
		%	15.7%	39.8%
	合計	人	143/221	149/203
		%	64.7%	73.4%

また、単位取得状況における「器楽Ⅰ」バイエル最終進度を調べると、個別には、76番終了で「器楽Ⅱ」の単位を取得しているケースもあれば、103番終了であっても「器楽Ⅱ」の単位が未取得のケースもあり、ある一定のバイエルの終了進度であれば、練習を重ねることで、さらなる弾き歌い演奏技術向上の可能性が認められるのである。

表11. 経験別高校音楽履修状況

年度		H19		H20		H21		H22	
学生数		学生	履修者	学生	履修者	学生	履修者	学生	履修者
経験者	人	19	15	10	7	8	6	10	8
	%	－	79%	－	70%	－	75%	－	80%
初心者	人	108	54	113	68	101	66	102	60
	%	－	50%	－	60.1%	－	65.3%	－	58.8%
合計	人	127	69	123	75	109	72	112	68
	%	－	54.3%	－	61.0%	－	66.1%	－	60.7%

このような集計結果により、「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」の開講時期の改定は、「器楽Ⅰ」での初心者のバイエル終了者数は減少したにもかかわらず、「器楽Ⅱ」の課題終了者数が増加したことで、弾き歌い演奏技術の修得を目指す上では効果的であったと考えられる。

また、学期途中での教材変更は、移行がスムースに行えないのではないかと危惧されていたが、実施後には、学生の器楽曲のレベルを把握した状態で「弾き歌い」の指導ができ、大変指導しやすかったという意見がピアノ担当教員から出されていた。

その他、高校音楽履修状況では、初心者に比べ経験者の履修率は高く、音楽への興味関心の違いを見ることができる。ピアノ・電子ピアノ所有状況においても初心者の所有率は経験者に比べ低いが、単位取得率が所有率を上回ることを鑑みれば、大学のピアノ練習室の整備等の練習環境が整っていることも重要な条件であると考えられる。

また、初心者のバイエル課題終了者所見に見られる受講態度の特徴については、年度により内容は異なるものの、真面目である・よく練習する・努力家であるということに加え、明るい・礼儀正しいという記述が見られることから、レッスン時の挨拶指導の大切さを窺い知ることがきる。すなわち、挨拶や言葉を交わすことで教師と生徒とのコミュニケーションが円滑になり、互いの信頼関係の構築に繋がること。そのことが隠された指導力として学生のピアノ演奏技術向上に寄与していると考えられるのである。

以上のような結果をふまえ、今後は副教材の開発等を行いながら、さらなる弾き歌い演奏技術の向上を図りたいと考えている。

表12. 経験別高校音楽履修状況の推移

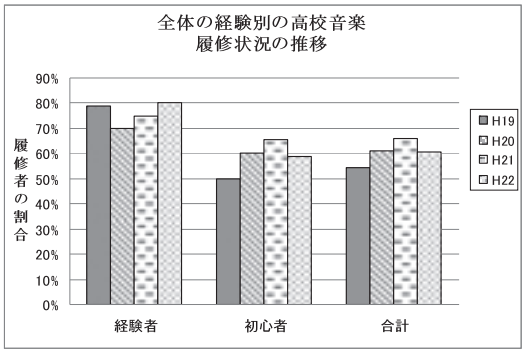


表14. 経験別ピアノ・電子ピアノ所有状況の推移

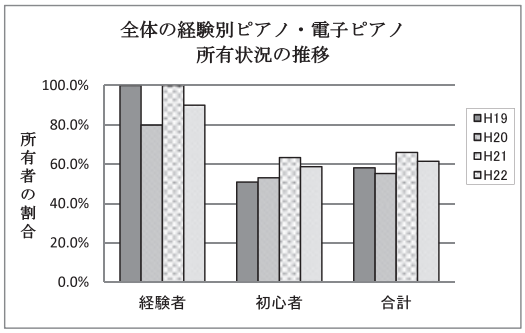


表13. 経験別ピアノ・電子ピアノ所有状況

年度		H19		H20		H21		H22	
学生数		学生	所有者	学生	所有者	学生	所有者	学生	所有者
経験者	人	19	19	10	8	8	8	10	9
	%	−	100.0%	−	80.0%	−	100.0%	−	90.0%
初心者	人	108	55	113	60	101	64	102	60
	%	−	50.9%	−	53.1%	−	63.4%	−	58.8%
合計	人	127	74	123	68	109	72	112	69
	%	−	58.3%	−	55.3%	−	66.1%	−	61.6%

表15　初心者のバイエル課題終了者所見に見られる受講態度の特徴（枠内は人数）

	H19	H20	H21	H22
明るい	11	17	7	4
素直	7	5	4	1
礼儀正しい	6	3	1	7
よく練習する	16	12	15	16
真面目	6	16	10	12
努力家	11	7	13	14
音楽が好き･楽しんで弾いている	―	11	2	5

【付記】

本研究を遂行するにあたり、本学ピアノ非常勤講師金子美和先生にご協力いただきましたことをここに記し、感謝の意を表します。

【参考文献】

1）「音楽記録表」，別府大学短期大学部初等教育科音楽研究室，2008～2010.
2）小林美実編，『こどものうた200』，チャイルド本社，2011.
3）小林美実編，『続こどものうた200』，チャイルド本社，2011.
4）『バイエル・ピアノ教則本』，カワイ出版，2007.
5）『ブルグミュラー25の練習曲』，全音楽譜出版社，1997.
6）『ソナチネアルバム１』，全音楽譜出版社，2006.
7）『ソナチネアルバム２』，全音楽譜出版社，2006.
8）『ソナタアルバム１』，音楽之友社，1955.
9）井口基成編，『モーツァルト集１』，春秋社，1977.
10）井口基成編，『ベートーヴェン集１』，春秋社，1977.
11）井口基成編，『ベートーヴェン集２』，春秋社，1977.